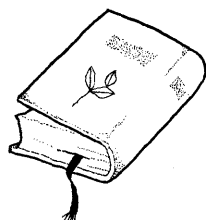


特集 〈緑蔭図書紹介〉

『海・呼吸・古代形象』

三木成夫著・うぶすな書院

吉増 克實



読者は、巻頭の論文「母性の進化」をお読みになっただけでたちまち三木成夫しげおの世界へ引き込まれるにちがいない。目次に目を通すだけでも、「仕事は息抜きの要領で」「海と呼吸のリズム」「いのち」について」「内臓の感受性が鈍くては世界は感知できない」などの題名からこの本で繰り広げられる三木成夫の独自の世界を予感されることであろう。

三木成夫は一九二五年、香川県丸亀に生まれ、東京大学医学部を卒業後、同大学の解剖学教室に入り、一九五七年から東京医科歯科大学の解剖学教室に在職、一九七三年に東京芸術大学に移って、保健管理センター所長および生物学教授となったあとは一九八七年に死去するまでその職にあった。伝説的名講義で多くの医学生、芸大生を魅了したのみならず、その強烈な個性から発せ

られるオーラによって、出会った人々は、時にその後の人生が変わってしまうほどの強烈な「三木体験」を受けたと言っても言い過ぎではないであろう。正直に言えば、わたし自身もそのひとりなのである。そういうわけで生前から知る人ぞ知る人物であったが、遺稿が次々と出版されるにつれ、雑誌の特集で取り上げられたり、学際的な広がりをもった三木成夫シンポジウムがひらかれたりと、むしろなくなった後、ますますその影響が拡がりつつあるように思う。

生前に出版された数少ない著作のうち、中公新書からでた『胎児の世界』は比較的よく知られているが、三木成夫の多様な魅力がよりよく出ているのは、むしろ死後、雑誌や新聞に書かれた論文、講演原稿などをまとめて出されたこの本であろう。それというのも、(編者の名前がどこにも出てこないのを不思議に思われる方もいるであろう)これを編んだのが三木成夫の著作を出版する

ためにうぶすな書院を興し、三木成夫の死後は遺稿の整理出版を続けているうぶすな書院社主の塚本庸夫氏であり、氏の三木成夫に対する傾倒が、おのずと、三木成夫ならではの世界をこの本の中に現出させているのである。ちなみに、書名も、この本の魅力的な内容を象徴するかのようなかヴァーの神秘的なバリ島の夜明けの写真も氏によるものだ。

三木成夫の思想の魅力は、専門の比較発生学に基礎をおきながら、人体の構造の(しかけ、しくみでなく)「すがた、かたち」の意味を、あるいは人間の行動、文化あるいは病気の由来を、悠久の地球史的時間をたどりながら、それらが遠い「生命記憶」のいまここでのあらわれであることを教えてくれるところにある。たとえば、母なる海の中ではぐくまれた生命は、進化の途上、海を母胎の羊水として体の中に抱えて上陸した。「母なる海」とは単なる文学的比喩ではないのである

る。またたとえ何か集中するには息をとめなければならぬ。われわれの不自由も、生命の上陸に伴って、内臓筋（不随意筋）によって自律的に行われていた水中生活でのえらによる呼吸ができなくなつて、本来は個体の移動のために使われる骨格筋（随意筋）を呼吸筋に代用しなければならなかつたという生命史の事実と繋がるのである。

三木は、生命形態の原型を、植物と共通する「栄養―生殖」をつかさどる植物性過程の内臓系と、それをとりまく「感覚―運動」をつかさどる動物独特の体壁系とからなるものと見て、それが地球史的時間の中で絶え間なくメタモルフォーゼを遂げていく様を描きながら、しかし、植物性過程の生命にとつての原初性根源性を説いてやまない。その場に植わつたままで宇宙と交流する植物的な生から、そのままではみずからを養うこともできず、食物と異性を求めてさまよい歩く動物の生への変化の中で、「心」がどのような運命をたどる

ことになつたか。「動物の中でも最も動物的なもの」となり、理知と意志一辺倒になつて心を見失いそうになっている人間にとつて、生の充実、心の豊さを取り戻す道は、どこにあるのか。それはどうやら生命記憶の世界を取り戻すこと、「内臓感覚」を取り戻すことにありそうではある。『内臓のはたらきとこどものこころ』（築地書館）という著作もある。子育ても、われわれの意識もとどかぬ深さの中で、しかし確かにはたらき続けている生命記憶の世界と繋がっているのである。

自転しつつ太陽の周りを回りながら、地球は、四季のリズムの中を桜前線と紅葉前線との交代に彩られ、鳥は魚は食の相と性の相とのリズム的交代の中を、誕生の地と生長の地との間を渡り回遊する。三木成夫の世界では、森羅万象がリズム的に交響している。

三木成夫に関心を持たれた読者には、同じくうぶすな書院から出版されている『生命形態の自然

大人歴二十五年、少年少女からのメッセージ

宮迫千鶴 『母という経験』

自立から受容へ―少女文学を再読して』

山田詠美 『ぼくは勉強ができない』

友定 啓子

誌』『生命形態学序説』、また本年九月に出版予定の『ヒトのからだ』を是非お読みになるようお勧めしたいと思う。また、三木成夫の思想に大きな影響を与えた、ドイツの生命の哲学者、L・ク

ラーゲスの著作『リズムの本質』（みすず書房）『性格学の基礎』『性格学の基礎づけのために』『人間と大地』（以上うぶすな書院）も、お勧めしたい本である。（東京女子医科大学）

大人を二十五年ほど体験してわかってきたことは、かつて読んだ物語にでてきた「悪い人」はみんな「普通の人」だということだ。たとえば、あ

のアルプスの少女『ハイジ』にでてくるこわいロッテンマイヤーさんは「普通の人」で、今も日常的に出会っている。自分はゼーゼマンおばあき